

『日高川入相花王』

原作「日高川入相花王」は、宝暦九年（一七五九）に竹本座で初演された全五段の時代物。道成寺伝説に取材して、四段目と五段目で真那古庄司の娘清姫と安珍が描かれるが、現行の「日高川入相花王」とは、設定もまったく異なる。清姫自身の情念による蛇体への変身をはじめ、現行「日高川」に近い内容は、寛保二年（一七四二）豊竹座初演の「道成寺現在蛇鱗」で、真子庄司の娘清姫と安珍、許嫁の錦の前を描く四段目は並木宗輔の執筆と推定されている。この「現在蛇鱗」四段目の「清姫日高川之段」が改作されて独立、十九世紀半ばごろから「日高川現在鱗」などの題となり、やがて「日高川入相花王」の題名での上演が定着していったようである。

安珍（藤原百川の子安よし）に許嫁錦の前があることを知って、清姫が嫉妬に狂う。安珍と錦の前は道成寺に身を隠すこととして、安珍が先行して道成寺に向かうのを清姫が追って日高川まで辿り着いた、という設定。渡し守に川を渡してほしいと頼むものの、渡し守はそれを断る。嫉妬の念から蛇体となった清姫は、川に飛び込んで、安珍の後を追って行くのだった。

「聞こえませぬ安珍様」以下のクドキと、人形ならではの変身のスペクタクルが、文楽での道成寺物を代表するといえよう。清純な娘が嫉妬に身を焼き、ガブのかしらで、帯を蛇の尾のようになびかせて川を渡るのが大きな見せ場。なお、川岸に置かれた竹で編んだ網のようなものは、護岸のための「蛇籠」。蛇や龍は水神の化身とされ、もともと水辺と縁が深いとされている。

（児玉竜一）